

北守將軍と三人兄弟の医者

宮沢賢治

一、三人兄弟の医者

むかしラユーといふ首都に、兄弟三人の医者がゐた。いちばん上のリンパーは、普通の人の医者だつた。その弟のリンパーは、馬や羊の医者だつた。いちばん末のリンパーは、草だの木だのの医者だつた。そして兄弟三人は、町のいちばん南にあたる、黄いろな崖のとつばなへ、青い瓦の病院を、三つならべて建ててゐて、てんでに白や朱の旗を、風にぱたぱた云はせてゐた。坂のふもとで見てゐると、漆にかぶれた坊さんや、少しびつこをひく馬や、萎れかかった牡丹の鉢を、車につけて引く園丁や、いんこを入れた鳥籠や、次から次とのぼつて行つて、さて坂上に行き着くと、病氣の人は、左のリンパー先生へ、馬や羊や鳥類は、中のリンパー先生へ、草木をもった人たちは、右のリンパー先生へ、三つにわかれてはひるのだつた。さて三人は三人とも、実に医術もよくできて、また仁心も相当あつて、たしかにもはや名医の類であつたのだが、まだいゝ機会がなかつたために別に位もなかつたし、遠くへ名前も聞なかつた。ところがたうとうある日のこと、ふしぎなことが起つてきた。

## 二、北守將軍ソンバーユー

ある日のちやうど日の出ごろ、ラユーの町の人たちは、はるかな北の野原の方で、鳥か何かがたくさん群れて、声をそろへて鳴くやうな、をかしな音を、ときどき聴いた。はじめは誰も気かけず、店を掃いたりしてゐたが、朝めしすこしすぎたころ、だんだんそれが近づいて、みんな立派なチャルメラや、ラツパの音だとわかつてくると、町ぢゆうにはかにざわざわした。その間にはぱたぱたいふ、太鼓の類の音もする。もう商人も職人も、仕事ですこしも手につかない。門を守った兵隊たちは、まづ門をみなしつかりとざし、町をめぐった壁の上には、見張りの者をならべて置いて、それからお宮へ知らせを出した。そしてその日の午ちかく、ひづめの音や鎧の気配、また号令の声もして、向ふはすつかり、この町を、囲んでしまった模様であつた。番兵たちや、あらゆる町の人たちが、まるでときどきやりながら、矢を射る孔からのでいて見た。壁の外から北の方、まるで雲霞の軍勢だ。ひらひらひかる三角旗や、ほこがさながら林のやうだ。ことになんとも奇体なことは、兵隊たちが、みな灰いろでばさばさして、なんだかけむりのやうなのだ。するどい眼をして、ひげが二いろまつ白な、せなかのまがつた大將が、尻尾が箒のかたちになつて、うしろにぴんとのびてゐる白馬に乗つて先頭に立ち、大きな剣を空にあげ、声高々と歌つてゐる。

「北守将軍ほくしゆしょうぐんソンバーユーは

いま塞外さいがいの砂漠さばくから

やつとのことでもど戻つてきた。